

# 杜甫研究

— 「春望」、「春夜喜雨」を中心に —

山口大学人文学部言語文科学科

中国語文化論コース4年 美馬 こそ恵

(監修) 松尾 善弘

序

第一章 その生涯と詩風 (省略)

第一節 漂泊の人生

第二節 詩聖

第三節 社会派詩人

第二章 漢詩の読解法 (省略)

第三章 「春望」の解釈

第一節 詩形式と解釈の問題点

第二節 「花濺涙」「鳥驚心」の解釈

第三節 「連三月」の解釈

第四章 「春夜喜雨」の解釈

第一節 詩形式と解釈の問題点

第二節 「発生」の解釈

第三節 「入夜」の解釈

第四節 「花重錦官城」の文法構造

おわりに [監修者あとがき]

参考文献 (省略)

## 序

中国文化の中で、最も日本人に親しまれているもの、それは漢詩ではないだろうか。誰でも中学、高校の国語の授業で、漢詩、つまり古漢語で書かれた原文に訓読を施してその解釈を試みた経験があるだろう。しかしそれで私たち日本人は本当に、中国文化である漢詩を理解したことになるだろうか。昔から、日本の漢詩研究者は数え切れないくらいいるが、一篇の漢詩に対する解釈は一つに定まっておらず諸説紛々で、時にとんでもない誤訳がなされていることもある。つまり、漢語の知識は持たないが、共通して「漢字」という言語の表記手段を持っているために、そ

の意味ばかりを追って、実際には「理解したような気になっている」だけにすぎないという危険性が高いのである。

しかし、漢詩の解釈が「諸説紛々」であるのは日本のみならず、中国においても言えることである。それもやはり、語義ばかりを重視して主観的な解釈に陥ってしまったためである。つまり、日中共に「語義」に執着するあまり客観性を欠き、ともすれば詩人の意図に反する解釈をとってしまいがちなのである。では、詩人の意図したところに近づくにはどういったことを踏まえればよいのか。それは「語義」の他、「平仄」、「文法」であると考え。特に文法は疎かにされがちで、研究者によっては、詩の解釈において文法を論じるのは好ましくないと考えられているようだが、文法こそ客観的な解釈を導くのに最も重要な視点なのである。そこで私は「平仄」、「語義」それに「文法」を枢軸として、時代背景、詩人の詩風なども考慮しバランスのとれた解釈を目指したい。

ここでは杜甫の「春望」、「春夜喜雨」を題材にとり、両詩の特に問題のある箇所を中心に、解釈を試みる。古来「詩聖」と尊ばれる詩人、杜甫の視点によって切り取られた世界の、真実の姿を追求してみようと思うのである。

平成 14 年 1 月

### 第三章 「春望」の解釈

国破山河在 国破れて山河有り  
城春草木深 城春にして草木深し  
感時花濺淚 時に感じては 花にも涙を濺ぎ  
恨別鳥驚心 別れを恨みては 鳥にも心を驚かす  
烽火連三月 烽火 連なること三月  
家書抵萬金 家書 萬金に抵たる  
白頭搔更短 白頭 搔けば更に短く  
渾欲不勝簪 渾べて簪に勝へざらんと欲す

唐の玄宗、天宝 15 年 1 月もしくは、肅宗、至徳 2 年 (757 年)、3 月、杜甫 46 歳の作。「春望」とは、春のながめ。「月夜」、「対雪」などの詩と同じ頃に作られ、安祿山の乱中、賊軍に捕らえられて長安に拉致された杜甫が、春の景をながめてその感慨を詠んだ作品である。

#### 第一節 詩形式と解釈の問題点

【詩形式】

国破山河在 ● ● ○ ○ ●  
城春草木深 ○ ○ ● ● ◎

感時花濺淚 ● ○ ○ ● ●  
 (○)  
 恨別鳥驚心 ● ● ● ○ ◎  
 烽火連三月 ○ ● ○ ○ ●  
 (●)  
 家書抵萬金 ○ ○ ● ● ◎  
 白頭搔更短 ● ○ ○ ● ●  
 (○)  
 渾欲不勝簪 ○ ● ● ○ ◎  
 (●)

五言律詩。第一句二字目が「破」(pò)で仄、同じく第一句五字目は「在」(zài)で仄なので、「仄起り仄終わり」形式である。五言律詩の「仄起り仄終わり」形式の基本形式と比べてみると、第三句一字目、第七句一字目は平であるべきところを仄、第五句一字目、第八句一字目は仄であるべきところを平としている。これらは基本形式を外していることにはなるが、「一三五不論」の第一字目であるし、また特に第三句、第八句についてはかえってこのようにした方が変化があってよいともいえる。第七句と第八句はともに一字目の平仄を逆にして相殺しており、第三句と第五句は救拯されていないものの、平を仄、仄を平としているために全体の平仄のバランスは平：仄＝20：20と均衡がとれている。

次に「押韻（一韻到底）」「二四不同、二六対」「反法、粘法」「下三連」「孤平、孤仄」の五点についてそれぞれ点検してみる。

・押韻

「深」「心」「金」「簪」が下平十二侵韻で押韻しており、一韻到底である。

・二四不同、二六対 全てにおいて守られている。

第一句目 破 (●)、河 (○)  
 第二句目 春 (○)、木 (●)  
 第三句目 時 (○)、濺 (●)  
 第四句目 別 (●)、驚 (○)  
 第五句目 火 (●)、三 (○)  
 第六句目 書 (○)、萬 (●)  
 第七句目 頭 (○)、更 (●)  
 第八句目 欲 (●)、勝 (○)

・反法、粘法

特に二字目、四字目に着目して検証すると、以下の通りである。

二字目 / 四字目

第一句、第二句 破 (●)、春 (○) / 河 (○)、木 (●) …反法  
 第二句、第三句 春 (○)、時 (○) / 木 (●)、濺 (●) …粘法  
 第三句、第四句 時 (○)、別 (●) / 濺 (●)、驚 (○) …反法

第四句、第五句 別 (●)、火 (●) / 驚 (○)、三 (○) …粘法

第五句、第六句 火 (●)、書 (○) / 三 (○)、萬 (●) …反法

第六句、第七句 書 (○)、頭 (○) / 萬 (●)、更 (●) …粘法

第七句、第八句 頭 (○)、欲 (●) / 更 (●)、勝 (○) …反法

・下三連なし

・孤平、孤仄なし

山河在 ○ ○ ●

草木深 ● ● ◎

花濺淚 ○ ● ●

鳥驚心 ● ○ ◎

連三月 ○ ○ ●

抵萬金 ● ● ◎

搔更短 ○ ● ●

不勝簪 ● ○ ◎

#### 【解釈の問題点】

詩の和訳については、各種注釈書を見てもわかるとおり、実に様々な解釈がなされておりひとつに定まっていない。それはこの「春望」詩においても然りである。「春望」詩で、解釈の相違が見られる点は、以下の2点である。

#### 1. 「花濺淚」、「鳥驚心」の解釈

- A. 作者が、花を見ても涙を流し、鳥の声を聞いても心を痛める。(主語を作者ととる。)
- B. 花も涙を流すかのように、はらはらと散り、鳥も心を痛めているかのように啼く。(主語を花、鳥ととる。)

#### 2. 「連三月」の解釈

- A. 三ヶ月間／何ヶ月も続く意ととる。(「三月」を時量補語ととる)
- B. 三月まで続く意ととる。

次節より以上の問題点について順に考察を進めていく。

### 第二節 「花濺淚」、「鳥驚心」の解釈

#### A. 主語を作者ととる説

##### a. 『漢詩名句辞典』鎌田正、米山寅太郎著

〔戦乱のこの時世をいたみ悲しんでは、美しい花を見ても涙を流し、家族との離別をうらめ

しく思つては、小鳥の鳴き声を聞いてさえ、心を不安におののかせる。]

b. 『名句でたどる漢詩の世界』前野直彬編

〔花と鳥を主格にした擬人化と見る解釈もあるが、この詩の場合は適切ではない。花や鳥が人間の悲惨な状況に同情しているとみると、詩情が感傷に流されて弱くなってしまうからである。首聯の山河、草木を承けた頷聯の花、鳥はあくまで不変の姿と秩序をもって非情に存在する自然の側のものでなければならない。〕

c. 『評釈 中国歴代名詩選』猪口篤志著

〔花濺涙—文章なら「花が涙をそそぐ」ことであるが、詩では「濺涙於花」の花を提前した形(目的語を主語の位置にもってくる)と見てよい。「花は楽しく見るもの、その楽しいものに対しても涙を流す」というので、「花にも涙をそそぐ」とよむ。〕〔鳥驚心—飛びたつ鳥の羽音にも、賊兵ではないかと、はっと驚くのである。鳥を提前した形。鳥の声とみてもよい。〕

B. 主語を花、鳥とする説

a. 『杜詩鑑賞』夏松涼著

〔這兩句在修辭方式上擬人、是詩人通過人格化的景物的描写、烘托出自己国破家亡的悲痛心情的。(中略) 這種擬人手法、用来抒写詩人内心的悲苦、特別深刻有力、在我国古典詩詞中被常常運用。(中略) 出現在詩人眼前的花鳥、不再是單純的大自然中的花鳥、而是飽和着詩人的思想感情、是詩人難以压抑的憂時傷亂的愛國感情的形象化。〕

(この両句は修辭法上、擬人法であり、詩人は人格化された景物の描写を通して、自身の国家を失った悲痛な心情を際立たせているのだ。(中略) この種の擬人化は、詩人の内心の悲痛を描いて特に深淵で力強く、我が国の古典詩詞の中でしばしば運用されている。(中略) 詩人の眼前に現れた花鳥はもはや単なる大自然の花鳥ではなく、詩人の思想、感情を満たしており、詩人の時世や反乱に心痛め、抑えられない愛國心を形象化したものなのだ。)

b. 私が調べた中では見つからなかったが、杜甫『贈王二十四侍御契四十韻』詩を論拠として挙げ、〔曉鶯工迸淚 秋月解傷神〕の「曉鶯」、「秋月」が主語で擬人化されているとみなし、ここでもそれと同様に解釈する説がある。

c. 世阿弥『俊寛』

鬼界ヶ島に取り残された俊寛が嘆いた地謡に、「時を感じては花も涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥も心を動かせり」とあり、俊寛だけが残された恨みつらみをこの詩を引いて謡っている。謡曲では「花も」「鳥も」と、この詩を擬人化して読んでいる。

【考察】A説に拠った場合、その文法構造は、

① (我) 感 時 (我) (看) 花 濺 涙

(S) V O (S) (V) O V O

(我) 恨 別 (我) (聽) 鳥 驚 心  
(S) V O (S) (V) O V O

の連動式が考えられる。もしくは、

② (我) 感 時 (我) 濺 淚 (於/対) 花  
(S) V O (S) V O<sub>1</sub> O<sub>2</sub>  
(我) 恨 別 (我) 驚 心 (於/対) 鳥  
(S) V O (S) V O<sub>1</sub> O<sub>2</sub>

の「花」、「鳥」を提前した形の2通りが考えられる。①は [S-V-O] の「S我」と「V看、聴」を省いた形と捉えた場合である。この形をとる句の作品例は以下のようなものがある。括弧内は省略されていると考えられる語である。

◆「北征」杜甫

(我) (仰) 青雲 動 高興  
(仰いで高い青空を眺めれば、しきりに感  
興をかきたてられる)

◆「寄左省杜拾遺」岑參

(我) (眺) 青雲 (我) 羨 鳥飛  
(青雲を眺めては、鳥が高く飛んでいるの  
を羨ましく思う)

◆「清平調詞三首」其一 李白

(我) (看) 雲 (我) 想 衣裳  
(我) (看) 花 (我) 想 容  
(雲を見れば美しいお方の衣装が想われ、  
花を見れば美しいお方のお顔が想われる)

◆「秋思」許渾

(我) (看) 楚雲湘水 (我) 憶 同遊  
(楚の国に漂う雲、湘江の清らかな流れを  
見ていると、昔あの地方にともに遊んだ  
人々のことを思い出す。)

②は本来「S-V-O<sub>1</sub>-O<sub>2</sub>」構造であるところを、目的語の「花」、「鳥」を提前したと捉えた場合である。「S-V-O<sub>1</sub>-O<sub>2</sub>」構造をもつ句の作品例は以下のとおりである。

◆「寄韓鵬」李頎

寄 書 河上神明宰

◆「雜詩」王維

寄 書 家中 否

また、目的語が提前された形をとる句の作品例は以下のとおりである。

◆「冬日有懷李白」杜甫

終朝 独 而 思

◆「送朱大入秦」孟浩然

遊人 五陵 去

◆「送高三十五書記十五韻」杜甫

男兒 功名 遂

◆「鞏路感懷」呂溫

河上 空 徘徊

◆「詠懷古跡五首」其三 杜甫

分明 怨恨 曲中 論

◆「婦雁」錢起

二十五絃 彈 夜月

◆「韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬引」杜甫

盤 賜 將軍 拜舞 歸

◆「古別離」韋莊

更 把 玉鞭 雲外 指

◆「邯鄲少年行」高適  
黃金 用尽 還 疎索

◆「涼州歌第二疊」張子容  
胡笳 夜 聽 隴山頭

◆「帝京篇」駱賓王  
劍履 南宮 入

このように目的語が提前され、「V」と「O」の位置が入れ替わる例は多い。目的語の提前に限らず、

◆「十五夜望月」王建  
中庭 地 白 樹 棲 鴉

◆「贈盧五旧居」李頎  
嘖嘖 枯柳 宿 寒鴟

の両詩のように、「S」と「V」とが入れ替わる例も見られる。つまり、語順が入れ替わる現象は、平仄など規則の厳しい詩において決して珍しいことではなく、「花 濺 涙」、「鳥 驚 心」もその一例として十分に考えられるのである。

次に、B説に拠った場合の文法構造は、

(花) 感 時 花 濺 涙  
(S) V O S V O  
(鳥) 恨 別 鳥 驚 心  
(S) V O S V O

となり、「花が時世に心を痛めて、涙を流す」、「鳥が別れを恨んで、心を痛める」という風に、擬人化して読むことになる。擬人法が用いられている他の作品例には以下のようなものがある。

◆「贈王二十四侍御契四十韻」杜甫  
曉鶯 工 迸 淚  
秋月 解 傷 神…①

◆「汴河曲」李益  
風 起 楊花 愁 殺 人

◆「瘦馬行」杜甫  
東郊 瘦馬 使 我 傷

◆「涼州歌第二疊」張子容  
征馬 長思 青海上

◆「舟前小鷺兒」杜甫  
(鷺兒) 引 頸 嘖 船 逼

◆「西施石」樓穎  
石上 青苔 思 殺 人

◆「白帝城最高樓」杜甫  
城 尖 徑 仄 旌 旆 愁

◆「和左司張員外自洛使入京中路赴長安逢立春贈韋侍御及諸侯」孫逖

◆「奉觀嚴鄭公聽事 山江園」杜甫  
川 霓 飲 練 光

林下 輕風 待 落 梅

◆「梁苑」王昌齡  
城外 風 悲 欲 暮 天

◆「黃鶴樓」崔顥  
煙波 江上 使 人 愁

◆「送李判官之潤州行營」劉長卿  
草色 青青 送 馬 蹄

◆「和賈至舍人早朝大明宮之作」岑參  
花 迎 劍 佩 星 初 落

◆「古風」其四十七 李白

桃花 開 東園  
含 笑 夸 白日

◆「早起」李商隱

鶯花 啼 又 笑  
畢竟 是 誰 春

◆「贈別」杜牧

蠟 獨 有 心 還 惜 別  
替 人 垂 淚 到 天明

上記bで述べたように、①の詩は「花 濺 涙」、「鳥 驚 心」が擬人法であることの論拠として挙げられている。しかし、その文法構造を見てみると、

曉鶯 工 迸 涙                      曉鶯は（私の）涙を迸らせるのに工みであり、  
S V O(V O)

秋月 解 傷 神                      秋月は（私の）心を痛ませるのをこころえている。  
S V O(V O)

と考えられる。つまり、確かにこれは「擬人法」ではあるが、「涙を流し」、「心を痛める」のは「曉鶯」や「秋月」ではなく、あくまでも「私」であり、「花」が「涙を流し」、「鳥」が「心を痛める」と解釈するB説の論拠とはなり得ないのである。また、上記の例詩を見ても分かるが、注釈書aに述べられている通り、古典詩詞において「擬人法」がしばしば用いられているということは確かである。しかし、この場合においても擬人法で捉えるのが適切であろうか。この「春望」詩は安史の乱中、捕虜として長安に拘束されていた頃の作品であり、杜甫は賊軍によって無残に破壊された風景を目にして、恐らく憤懣やるかたなく、また悲しみに心を痛め、疎開先に残してきた家族とも連絡がつかず、心配に胸が締め付けられるような思いであったに違いない。そんな作品の中で、「花が時世に心を傷めて涙を流すようにはらはらと散り」、「鳥も別れを恨んで不安に心を傷ませているように鳴く」などという感傷的な表現をわざわざ用いるだろうか。第一章で述べたとおり、偉大な現実主義、社会派の詩人であった杜甫ならば、なおのこと疑問である。

【結論】

- 目的語が動詞の前に提起された形であると考えられること。
  - 杜甫の現実的、写実的な詩風からいっても当時の心境を察しても、ここで擬人法を用いたとは考えられないこと。
- 以上より、A説をとる。

第三節「連三月」の解釈

A. 三ヶ月間／何ヶ月も続くととる（「三月」を時量補語ととる）説

a. 『九家集註杜詩』

〔此詩作於天宝十五載之正月蓋祿山反於十四載之十一月至是則烽火連三月〕



(この詩は天宝十五年の一月に作られ、安祿山は十四年の十一月に反乱を起こしたので、烽火が三ヶ月以上続いている、というのである。)

b. 『詩語の諸相-唐詩ノート-』松浦友久著

〔近体詩における「三」の用法には、実際の数量を表すというよりは、慣用的に不特定多数を表す用法に拡大されている場合が多い。このように見て来ると、「季春三月」なり「春三箇月」なりのように、実際の数に限定する必要は無いことになる。〕

c. 『名句でたどる漢詩の世界』前野直彬編

〔すでに三月ものあいだ続いている。あるいは、すでに何か月ものあいだ続いているの意。「連」の下に一定の時間を示す語が結合すると、「～のあいだずっと」の意となる。また、一が少数の象徴であるのに対して、三が多数の象徴に用いられることが多いから、ここも多くの月つまり何か月もの意に解することも可能である。さらにこの詩の第五句の第四字は、第二字の仄声に対して、平声でなければならないから、数字の一から十までの中の唯一の平声の三が置かれたとも考えられる。必ずしも実数ととる必要はない。〕

d. 『評釈中国歴代名詩選』猪口篤志著

〔三か月である。この場合の三は多い意に見て何か月もと解するのがよい。旧暦三月ではない。訓み方も「さんげつ」がよい。〕

e. 『中国の名詩鑑賞5盛唐』内田泉之助監修 中島敏夫編

〔「三ヵ月続く」とする解釈のほか、「三月に連なり」と読んで「春の三月（陰暦の三月、すなわち春の終わり）まで続く」とする解釈がある。そのほか、「(戦乱が始まってから) 三月が二回繰り返された」とする解釈もあり、この解は中国では意外と多く採られている。わたしは、「春三ヵ月続いた」と解した。〕

B. 三月まで続くととる説

a. 『杜詩詳註』

〔鶴注 此当是至徳二載三月、陷賊營時所作。〕

〔これは至徳二年三月、賊軍の陣営に捕らえられた時に作られたものである。〕

b. 『杜少陵先生詩分類集註』

〔三月 指季春。〕

〔三月 季春（春を「孟春」、「仲春」、「季春」と分けるうちの「季春」）、三月を指す。〕

c. 『漢文名作選3漢詩』鎌田正監修 田部井文雄、高木重俊著

〔杜甫が長安を脱出するのに成功したのはこの年の四月であるから、「三月」の意味にとってもよいだろう。〕

d. 『中国詩人選集9杜甫上』注者 黒川洋一

〔陽春三月。一年のうちもっとも美しい季節である。〕

【考察】「三ヶ月」「三月」という「時間」が焦点となっているため、反乱が勃発した年やこの詩の成立年代を参考にしたいところであるが、史実がはっきりせず、成立年代も天宝15年とする説と至徳2年とする説とがあり、論拠とするには甚だ不安定である。よって、ここでもやはり文法を中心に考察を進めることにする。

まず、両説の文法構造をそれぞれ整理する。A説に拠った場合。

烽火 連 三月

S V C (時量補語)

B説に拠った場合。

烽火 連 三月

S V O

問題となる「連三月」を「連」と「三月」に分けて考えると、解釈の相違を生む原因となっているのは、

「連」… ・「～の間じゅうずっと続く」・「～まで続く」

「三月」… ・「三ヶ月間」(その派生として、「何ヶ月もの間」)・「春三月」

という、それぞれの語義の捉え方であることが分かる。以下、この点に着目して考察を進める。

ここで、「連」という語の他の作品における用いられ方を見てみる。

◆「仲春郊外」王勃

物色 連 三月

風光 繞 四鄰…①

◆「秦州雜詩」其九 杜甫

風 連 西極 動

◆「詠懷古跡五首」其三 杜甫

(昭君) 一去 紫台 連 朔漠

◆「長安古意」盧照鄰

長安大道 連 狹斜…②

◆「觀寺固請司馬弟山水圖」杜甫

方丈 渾 連 水

◆「同韋舍人早朝」沈佺期

闔闔 連 雲 起

◆「幽州新歲作」張說

辺鎮 戍歌 連夜 動…③

◆「送崔融」杜審言

祖帳 連 河闕

◆「扈從登封途中作」宋之問

曉雲 連 幕 捲

◆「題義公禪房」孟浩然

夕陽 連 雨足

◆「春江花月夜」張若虛

春江 潮水 連 海平

◆「送儲邕之武昌」李白

湖 連 張樂地

◆「江樓書感」趙嘏

月光 如 水 水 連 天

〈比較〉例詩

◆「築城行」南宋、劉克莊

旧時 広野 無 城処

而今 烽火 列 屯戍

◆「北征」杜甫

衾裯 稍 羅列

◆「潼関吏」杜甫

連 雲 列 戦格

◆「邙山」沈佺期

北邙山上 列 墳塋

①の詩は同じく「連 三月」という表現をしているが、ここでもやはり「物色（美しい景色）」が「三ヶ月間続く」のか、「三月まで続く」のか説が分かれるところであり、判断が難しい。その他の例を見ると「連」を「V」とする[S-V-O]構造がほとんどである。しかし、そのうち「連 三月（さんがつ）」のように「O」に時季を表す語が用いられる例は見当たらず、②の詩、長安大道 連 狭斜（長安の大道は狭い斜めの路地まで続いている）のように「～（場所）まで続く」というものばかりである。

また、③の詩、辺鎮 戍歌 連夜 動（辺鎮の戍歌は夜通し続く）のように「連」＋「一定の場所（量）を表す語」で、「～の間中ずっと」という意味になる例も確かにある。

『漢語大詞典』で、「連」＋「一定の場所（量）を表す語」を調べてみると、上に挙げた「連夜」のほか、以下の語がある。

〔連春〕 整春一天；一春。（春中ずっと）

〔連日〕 接連幾天。（数日続けざまに、数日間続けて）

〔連月〕 連続数月。（数ヶ月間続けて）

〔連冬〕 整個冬天。（冬中ずっと）

〔連年〕 接連多年。（長年の間続けて）

〔連旬〕 接連数旬。（数年の間続けて）

また〈比較〉には「列」を用いた例詩を挙げたが、この「列」も「つらねる」と訓む。この「列」と「連」とを比べてみると、「列」の方はものがポツポツと並ぶ、続くという意味であるのに対し、「連」は時間やもの、空間が途切れることなくずっと続く、という意味をもつ。

これらから察するに、やはり「連」は下に一定の時間を表す語がくると、「～の間じゅうずっと」という意味になるようである。

次に、詩における「時季、時間を表す語」の用いられ方を見してみる。

・時季詞（春三月など）

◆「茅屋為秋風所破歌」杜甫

八月 秋 高 風 怒号

◆「百憂集行」杜甫

庭前 八月 梨棗 熟

◆「同王徵君洞庭有懷」張謂

八月 洞庭 秋

◆「岳陽晚景」帳均

九月 末 成 衣

◆「胡笳歌送顏真卿使赴河隴」岑參

涼秋八月 蕭 関道 …①

◆「余杭醉歌贈吳山人」丁仙之

二月 春城 長命杯

◆「臨洞庭」孟浩然

八月 湖水 平

◆「石龕」杜甫

仲冬 見 虹霓 (仲冬；11月) …③

◆「九月九日登玄武山旅眺」盧照鄰

九月九日 眺 山川

◆「蜀中九日」王勃

九月九日 望 郷台

◆「黃鶴樓送孟浩然之広陵」李白

煙花三月 下 揚州…②

・時間詞 (三ヶ月など)

<時量補語となるもの>

◆「前出塞九首」其九 杜甫

従 軍 十余年

◆「後出塞五首」其五 杜甫

躍 馬 二十年

◆「恨別」杜甫

胡騎 長軀 五六年

◆「韋諷録事宅觀曹將軍画馬引」杜甫

將軍 得 名 三十載

◆「人日寄社二拾遺」高適

一臥 東山 三十春

◆「闕下贈裴舎人」錢起

獻賦 十年 猶 未 遇

<「時間詞」-「V」となるもの>

◆「哀王孫」杜甫

已經 百日 竄 荆棘

◆「石龕」杜甫

五歲 供 梁齊

◆「乾元中寓居同谷県作歌七首」其四 杜甫

十年 不見 来 何時

◆「宴城東莊」崔惠童

一月 主人 笑 幾回

◆「同韋舎人早朝」沈佺期

千春 奉 休曆

◆「早發白帝城」李白

千里江陵 一日 還

◆「塞上聞吹笛」高適

風 吹 一夜 滿 関山

まず、「時季詞」の例を見て分かるとおり「連 三月 (三月まで続く)」のように、「時季詞」が動詞の後に来て目的語となるものは見つからなかった。ちなみに、「1月～12月」を詩中に用いる場合、例詩①や②のように「涼秋八月」、「煙花三月」と、修飾語を頭につけることもある。また、例詩③のように「1～12月」の代わりに「仲冬」(11月のこと)などといった語を用いることもある。そういう場合にはすぐ時間詞と区別がつく。

「時間詞」の方は、通常の文法どおり動詞の前に置かれるものもあれば、動詞の後に来て「時量補語」となるものも決して少なくない。つまりこれは「連 三月」の「三月」を時量補語とすることも充分可能であるという証拠である。

古来、一季節を三つに区切り、春は「孟春」、「仲春」、「季春」の「三ヶ月」に分けられるが、「連三月」の「三月」も或いはこのことを指すのかもしれない。つまり、「春三ヶ月間続く」または、「一春中ずっと続く」ということである。特に王勃の「仲春郊外」[物色 連 三月 (美しい景色は春三ヶ月じゅうずっと続く)] はこのように捉えるのが適切ではないだろうか。

また、先に紹介した注釈書b、cにも述べられているとおり、「三」という数字は「三」そのものの意味の他に、「不特定多数」の意味を担うことが往々にしてある。それは、一～十までの数詞において、平声となるのが「三」だけだからである。例えば、李白の「秋浦歌」の「白髮三千丈」の「三千丈」は、実際に「白髮」が「三千丈」の長さであるはずがなく、「非常に長い」ことを表すにすぎない。ここでも、第五句目、第四字は必ず平声でなければならず、そのために「三」を用いたとすれば、「連 三月」は「何ヶ月もの間続く」とするのが適切であろう。

両説とも決定的な手がかりはなく、多少論拠が薄弱ではあるが、以上のことを考えあわせると「連 三月」は「三ヶ月間／何ヶ月もの間 続く」ととる方が適切であろうと思われる。またその場合の訓読は「連なること三月 (さんげつ)」がふさわしい。

#### 【結論】

- 「V」 + 「時間詞」(時量補語) の形をとる例は多く見られること。
  - 一方、「V」 + 「時季詞」([S-V-O] 構造) となる例が見られなかったこと。
- を主な論拠として、A説「三ヶ月間／何ヶ月もの間 続く」をとることにする。

## 第四章 「春夜喜雨」の解釈

好雨知時節 好雨 時節を知り  
当春乃發生 春に当たりて 乃ち發生す  
隨風潜入夜 風に随ひて 潜かに夜に入り  
潤物細無声 物を潤して 細かにして声無し  
野徑雲俱黑 野徑 雲 俱に黒く  
江船火独明 江船 火 独り明らかなり  
曉看紅濕処 曉に 紅の湿ふ処を看れば  
花重錦官城 花は錦官城に重からん

上元元年(760年)春、作者49歳、或いは翌上元二年(761年)50歳の時の作とされる。この頃の杜甫は、成都郊外の浣花草堂において、比較的安らいだ日々を送っていた。本首は詩題のとおり、春の訪れと共に降り始めた夜の雨を喜ぶ詩である。

## 第一節 詩形式と解釈の問題点

### 【詩形式】

好雨知時節 ● ● ○ ○ ●  
当春乃發生 ○ ○ ● ● ◎  
隨風潛入夜 ○ ○ ○ ● ●  
潤物細無声 ● ● ● ○ ◎  
野徑雲俱黑 ● ● ○ ○ ●  
江船火独明 ○ ○ ● ● ◎  
曉看紅湿処 ● ○ ○ ● ●  
花重錦官城 ○ ● ● ○ ◎  
(●)

五言律詩。第一句二字目は「好」(hǎo)で仄、五字目は「節(セツ)」で仄なので、「仄起り、仄終わり」形式である。五言律詩の「仄起り、仄終わり」の基本形式と比べてみると、第七句一字目は平であるべきところを仄、第八句一字目は仄であるべきところを平としている。「春望」詩と同様、これらは基本形式から外れることにはなるが第一字目なので不論、また○○○、●●●となるよりもかえってよいようにも思われる。第七句、第八句両句にわたって相殺しているので、全体の平仄のバランスは平：仄＝20：20と元にもどっている。

次に「押韻」、「二四不同、二六対」、「反法、粘法」、「孤平、孤仄」、「下三連」のそれぞれについて点検する。

- ・押韻 「生」「声」「明」「城(せい)」が下平八庚の韻で押韻しており、一韻到底である。
- ・二四不同、二六対 二四不同がすべて守られている。

第一句目 雨(●)、時(○)  
第二句目 春(○)、發(●)  
第三句目 風(○)、入(●)  
第四句目 物(●)、無(○)  
第五句目 徑(●)、俱(○)  
第六句目 船(○)、独(●)  
第七句目 看(○)、湿(●)  
第八句目 重(●)、官(○)

- ・反法、粘法

二字目、四字目に着目すると、以下の通り。

第一句、第二句 雨(●)、春(○) / 時(○)、發(●) …反法  
第二句、第三句 春(○)、風(○) / 發(●)、入(●) …粘法  
第三句、第四句 風(○)、物(●) / 入(●)、無(○) …反法

第四句、第五句 物 (●)、径 (●) / 無 (○)、俱 (○) …粘法

第五句、第六句 径 (●)、船 (○) / 俱 (○)、独 (●) …反法

第六句、第七句 船 (○)、看 (○) / 独 (●)、湿 (●) …粘法

第七句、第八句 看 (○)、重 (●) / 湿 (●)、官 (○) …反法

・孤平、孤仄なし

・下三連なし

知時節 ○○●

乃発生 ●●◎

潜入夜 ○●●

細無声 ●○○

雲俱黒 ○○●

火独明 ●●◎

紅湿処 ○●●

錦官城 ●○○

#### 【解釈の問題点】

「春夜喜雨」詩において、解釈の相違が見られる点は、以下の3点である。

##### 1. 「発生」の解釈

- A. 万物を生育させる意とする。
- B. 雨が降り始める意とする。

##### 2. 「入夜」の解釈

- A. 雨が夜になっても降り続く意とする。
  - ・雨が夜まで入り込む
  - ・(雨が降ったまま) 夜になる
- B. 雨が夜になって降り出した、とする。

##### 3. 第八句目の文法構造

- A. 「花は重からん錦官城」と訓読する場合。
- B. 「花は錦官城に重からん」と訓読する場合。

次節より以上の問題点について順に考察を進めていく。

#### 第二節 「発生」の解釈

##### A. 万物を生育させる意とする説

- a. 『九家集註杜詩』黄永 武博主編

〔趙云爾雅曰春為發生〕（趙いわく、『爾雅』に「春は發生と為す」と言っている。）

b. 『杜臆』王司爽著

〔謂当春乃万物發生之時也、若解作雨發生則陋矣。〕

（春になって万物が發生する時を言うのであり、雨が發生するとするのは低俗である。）

c. 『杜甫ノート』「春雨」吉川幸次郎

〔「發生」とは、ものを開き育てることであって、それは春の徳であるとされる。〕

d. 『漢詩名句辞典』鎌田正、米山寅太郎著

〔よい雨は降るべき時をきちんと心得ており、春になった今こそ万物發生の営みを始めたのである。〕

B. 雨が降り始める意ととる説

a. 『杜詩鑑賞』夏松涼著

〔發生：即降。〕（發生：即ち雨が降ることである。）

b. 『中国の詩集⑤杜甫詩集』三好豊一郎訳

〔よき雨は降るべき時節を違えずに まさに春 心得顔に降り出した〕

c. 『中国の名詩鑑賞5盛唐』

〔この聯が詩の起承転結の起の役割を果す聯であることおよび詩題の「雨を喜ぶ」からすると、とにかく雨が春を迎えてふりはじめることをいう句だと解したい。（中略）万物發生の時に当たって、その一環、その兆しとして雨もまた発生生ずると解してさしつかえないように思う。その雨が物を潤して、万物をさらに発生へと導くのである。〕

【考察】 私が参考にした注釈書の中では、A説が圧倒的に多かった。どうやら『爾雅』「釈天」篇や『莊子』の「春氣発百草生」などの影響からか、古来、「春は万物が発生生じる季節」という概念が強く根づいているようであり、『漢語大詞典』にも「指春天。（春を指す。）」や「指万物。（万物を指す。）」という意味で解せられている。しかし、そういった「発生」という語からくる「春のイメージ」にあまりにも執着しすぎているという感が強く、今一度冷静に客観的な視点で読み解く必要がある。ここでは、文法を中心に考察を進めていく。

まず、A説aに挙げられている『爾雅』「釈天」篇の記述が論拠となりうるかどうかを検証する。「当春乃発生」というこの句において、「発生」は明らかに動詞である。ところが一方、『爾雅』「釈天」篇の「発生」は名詞であると考えられる。

春 為 発生、夏 為 長嬴、秋 為 収成、冬 為 安寧。

S V O S V O S V O S V O

つまり、名詞「発生」が「万物を発生生じる春」という意味を持っていても、だからといって、動詞「発生」が「万物を（が）発生生じる」という意味を持つということの証明にはならない。



したがって、これはA説を成立させる論拠とはなりえないのである。

次に文法構造はどうなるかを考える。考えられるのは以下のとおり。

- 1、S-V構造 (V = 「発生」、自動詞)
- 2、S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub> (存現文) 構造 (V = 「発生」自動詞)
- 3、S-V-O構造 (V = 「発生」、他動詞)

ここで、この詩の第四句までを見ると、好雨知時節 当春乃発生 随風潜入夜 潤物細無声  
その主体語は「好雨」であることが分かる。したがって、上記1～3の「S」もしくは「S<sub>I</sub>」は「好雨」となる。

まず、1の文法構造 [S-V (V=自動詞)] をとる場合は、  
好雨 発生 (好雨が発生する) →B説となる。また、先にも述べたように主語は「好雨」である  
ので、この場合はA説での解釈、[万物 発生 (万物が発生する)] は不可である。

次に、2 (S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>) のように「発生」を「存現動詞」と捉えた場合を考える。存現動詞  
とは、その多くは人体や物体の移動に関わるもの、ものごとの存在・出現・消失、自然現象に関  
わるもので、現代語では他に、「生」、「死」、「出現」、「爆発」、「走」、「落」、「来」、「跑」、「掉」、「下」、  
等がある。

こういった動詞を用いる「存現文」は、  
時間詞/場所詞+動詞+名詞 (S<sub>II</sub>+V+S<sub>I</sub>) (例)「外頭 下着 雨 呢」という語順をとる。

存現文構造の句を含む作品には以下のようなものがある。

- |   |  |
|---|--|
| ◆「示従孫濟」杜甫<br>堂前 自 生 竹<br>堂前 自 生 萱       | ◆「早發交崖山還太室作」崔曙<br>川水 生 積雪                                  |
| ◆「秋雨嘆三首」其一 杜甫<br>開 花 無 数 黃 金 錢          | ◆「龍池篇」沈佺期<br>君 王 鳧 雁 有 光 輝                                 |
| ◆「新安吏」杜甫<br>肥 男 有 母 送<br>…<br>室 中 更 無 人 | ◆「奉和春日幸望春宮應制」蘇頲<br>宸 遊 對 比 歡 無 極<br>◆「田家春望」高適<br>可 嘆 無 知 己 |

同様に考えると、[発生 好雨 (好雨が発生する)] →B説となる。

この場合も「S<sub>I</sub>」 = 「好雨」なので、1の場合と同じく、A説での解釈 [発生 万物 (万物  
が発生する)] は不可である。

次に、3の文法構造〔S-V-O (V=他動詞)〕をとる場合を考える。現代語において、「発生」はふつう自動詞であり、このような構造はとらないが、ここでは一つの可能性として考慮に入れることにする。その場合、〔好雨 発生 万物 (好雨が万物を発生させる)〕→A説となる。だが、「万物」という語は詩中に全く現れていないわけだ。

以上、考えられる3つの文法構造を示したが、これはあくまでも仮説にすぎない。そこで、他の詩における「発生」の用いられ方を見てみることにする。ただし、私が調べたところでは、「発生」が用いられている詩が2首しか見つからなかったのも、それに準ずると思われる、「発」、「生」が用いられている詩も参考にする。

<1 (S-V) の構造をとるもの>

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| ◆「春日田園雜興」朱熹老 (元) | ◆「春江花月夜」張若虎   |
| 不尽 形容 雨 発生       | 海上明月 共 潮 生    |
| ◆「与季十二白同尋范十隱居」杜甫 | ◆「送友人入蜀」李白    |
| 入 門 高興 発         | 雲 傍 馬頭 生      |
| ◆「秦州雜詩二十首」其四 杜甫  | ◆「雜詩」王維       |
| 鼓角 縁辺郡           | 已 見 寒梅 発      |
| 川原 欲夜時           | ◆「怨歌行」班婕妤 (漢) |
| 秋聽 殷地 発          | 動揺 微風 発       |
| ◆「長安古意」盧照鄰       |               |
| 独 有 南山桂花 発       |               |

<2 (S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>) の構造をとるもの>

- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| ◆「示從孫濟」杜甫 (上記)      | ◆「帝王篇」駱賓王         |
| ◆「哀江頭」杜甫            | 当時 一旦 擅 繁華        |
| 苑中 万物 生 顔色          | 自言 千載 長 驕奢        |
| ◆「早發交崖山還太室作」崔曙 (上記) | 倏忽 搏 風 生 羽翼       |
| ◆「余杭醉歌贈吳山人」丁仙之      | 須臾 失 浪 委 泥沙       |
| 桃花 昨夜 撩乱 開          | ◆「大同殿生玉芝龍池上有慶雲    |
| 当 軒 発 色 映 樓台        | 百官共觀聖恩便賜燕樂敢書即時」王維 |
|                     | 豈 知 玉殿 生 三秀       |
|                     | ◆「班婕妤」其二 王維       |
|                     | 宮殿 生 秋草           |

<3 [S-V-O (V=他動詞)] の構造をとるもの>

- |           |                            |
|-----------|----------------------------|
| ◆「江陵望幸」杜甫 | (一刻も早く皇帝自ら近衛の軍隊を儀仗として下し、恵み |
|-----------|----------------------------|

(皇帝) 早 発 雲台仗      の波が、ひからびた魚のような我々人民を潤し救い給うこ  
恩波 起 涵鱗…①      とが何より待ち遠しい。)

◆「成徳楽」王表

一声歌 発 満城秋…②

<その他>

◆「奉使巡検両京路種果樹事畢入因詠歌」鄭審

聖徳 周 天壤, 韶華 満 帝畿。九重 承 渙汗, 千里 樹 芳菲。  
陝塞 余陰 薄, 関河 旧色 微。発生 和気 動, 封植 衆心 帰。  
春露 條 応 弱, 秋霜 果 定 肥。…

以上の作品から、

1、S-V：好雨 発生 →B説

2、(S<sub>II</sub>-) V-S<sub>I</sub>：発生 (好雨) →B説は無理なく成り立つといえる。

一方、3の[S-V-O]構造は、例詩①及び②から察するに、「O」が欠けていては成り立たないと考えられ、

3、S-V-O：好雨 発生 (万物) →A説の「O」に当たる「万物」という語が詩中一度も現れていない以上、この文法構造は成り立たないということになる。

また、<その他>に挙げた「奉使……」詩における「発生」は、前後の句の構造から察するに、「名詞」であると考えられ、『爾雅』「釈天」篇と同様、この場合の論拠とはなり得ない。

【結論】

■第四句までの主体語は「好雨」であること。

■文法構造は、[S-V：好雨 発生] / [(S<sub>II</sub>-) V- (S<sub>I</sub>): 発生 (好雨)]

と考えられること。

■[S-V-(O)：好雨 発生 (万物)]とはなり得ないこと。

また、第一句目では「雨が降る」ことを言及していないことを考え合わせて、B説「雨が降り始める意」を妥当とする。

第三節 「入夜」の解釈

A. 雨が夜になっても降り続くととる説

・雨が夜まで入り込む

a. 『中国の名詩鑑賞4 杜甫』目加田誠著

〔入夜 夜に降りつづき〕

b. 『漢詩の辞典』松浦友久編、植木久行、宇野直人、松原朗著

〔恵みの雨は、時節を弁え、春になって、待ちかねたように降り出した。風とともに、密か

に夜まで入り込み、]

[春雨の、霧のように細かい雨滴は、音もなく降って、あらゆる物を、隅々まで潤す。時間をも、しっとり潤す。「密かに夜に入る」とは、雨が戸口の中まで降り込んで床を湿らすように、夜の中まで降り込んで、時間を濡らすことを言う。これこそが、杜甫の想念の中でどこまでも肥え太った、春雨のイメージなのである。]

・(雨が降ったまま) 夜になる

c. 『心象紀行／漢詩の情景①自然への讃歌』松浦友久編、解説田口暢穂

[風に吹かれるまま、いつの間にか夜に及び]

[第三句「夜に入る」は雨が夜まで降りつづく意に解しておく。]

d. 『中国の詩集⑤杜甫詩集』三好豊一郎訳

[風吹くままにいつかひっそり夜となり]

B. 雨が夜になって降り出したととる説

a. 『杜詩詳註』仇兆鰲

[潜入細潤正状好雨発生] (「潜入」、「細潤」は正しく好雨が発生する様子を描いている。)

b. 『杜甫詩選注』

[隨風潜入夜、潤物細無聲 這二句写春夜里、在人們不知不覺的時候、細雨悄悄地來潤、無聲無息地滋潤着万物。] (この二句は春の夜、人々が知らない時にいつのまにか、こぬか雨がひっそりとやって来て、何の音もなく万物をしっとりと潤しているさまを描いている。)

c. 『中国の名詩鑑賞5盛唐』

[題からすると、夜になってふりはじめた雨を喜ぶとした方が自然でもあるし新鮮でもある。]

[雨が夜に入って降り出したとするなら、ここの起聯から領聯へのつながり方は、「春に当たって発生す」その「発生」、つまり「降りをはじめ」という言葉を受けて降り出した雨が「風に随って潜かに夜に入る」とつながっていくのではない。そうではなくて(中略)詩の最初に示した「悟境」即ち一つの結論を、次の聯であとから補足してその成立の所以を説明した形ということになる。「発生」したことを知り、次にその「発生」がまさに時を得たものであることを悟り、「時を知る」という認識が成立する。]

d. 『あじあブックス 漢詩のことば』「雨」向島成美著

[漢の桓寬の『塩鉄論』水旱篇(中略)「此の時に当たりて、雨は塊を破らず、風は条を鳴らさず、旬(十日)にして一たび雨ふり、雨降るは必ず夜を以てす。丘陵高下と無く皆熟せり(当此之時、雨不破塊、風不鳴条、旬而一雨、雨必以夜、無丘陵高下皆熟)」という。これによると、豊作をもたらすよき雨について、十日ばかりの間をおいて降り、しかも夜の時間に降るものという意識が古代にはあったようだ。杜甫の春夜の雨も恐らくはそうしたことを踏まえているのだろう。]

e. 『杜甫ノート』 吉川幸次郎著

〔「夜に入る」とは、夜という事態の中に、雨が潜入することであって、昼からの雨が夜に入っ  
てなお降りつづくことではない。埃りっぽい風の吹く花曇りの日、夜になって風が落ち、雨  
戸をくって見れば雨であったというのは、誰も春の日に多い経験であるが、それをきわめて  
巧妙に、的確に、表現したのが、「随風潜入夜」の五字である。〕

【考察】 まず、A説に拠った場合の文法構造は、

・雨が夜まで入り込む

(好雨) 随 風 (好雨) <潜>入 夜

(S) V O (S) V O

・(雨が降ったまま)夜になる

[(好雨) 随 風] <潜>入 夜

[(S) V O] S<sub>II</sub> V S<sub>I</sub>

となる。第二節で結論を出したように、第二句の「発生」という語により、「好雨」はすでに降  
り出している。その「好雨」が、風のまにまに「夜」という時間帯の中に紛れ込む、というのが  
前者[S-V-O]構造。第二句で「好雨」が降り出し、その状態のまま、「夜」が訪れる(到了  
晩上)、というニュアンスを持つのが後者[S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>] (存現文)構造である。どちらも「雨  
が夜になっても降り続く」という点では一致するので、合わせて一つの説とみなした。どちらの  
文法構造で解釈しても誤りではないと思われるが、より正確な解釈を得るために更に考察を進め  
ることにする。

まず、他の作品において、「入」が[S-V-O]構造で用いられている例を以下に挙げる。

◆「夢李白二首」其一 杜甫

故人 入 我夢

◆「返照」杜甫

返照 入 江 翻 石壁

◆「芙蓉楼送辛渐」王昌齡

寒雨 連 江 夜 入 吳

◆「次北固山下」王灣

江春 入 旧年

◆「軍城早秋」嚴武

昨夜 秋風 入 漢関

このように、「入」が[S-V-O]構造の句で用いられるのは決して珍しくないし、また、「芙  
蓉楼送辛渐」の例では、同じく「雨」が「入」の主体語となっており、他にも「返照」、「江春」、  
「秋風」と、自然が主体語となるものが多い。したがって、[好雨S 入V 夜O]という文法構  
造は充分成り立つと言える。

次に、「入夜」という熟語を『唐詩字詞大辞典』で調べたところ、「到了 晩上」という意味で  
載っていた。では、実際に「到了 晩上」の意味で「入夜」が用いられている例はあるだろうか。

また、「入+〜（時を表す語）」で、「〜が訪れる／〜になる」という意味になる例があるだろうか。結果は以下の通りである。

◆「堤上行」劉萬錫

江南 江北 望 烟波  
入 夜 行人 相応歌

◆「鹽州過胡兒飲馬泉」李益

莫 遣 行人 照 容髯  
恐 驚 憔悴 入 新年

<参考>

◆「西山」常建

至 夜 轉 清迥

「西山」の例は「入夜」ではないが、同様の用例だと考えられるので参考として挙げた。「堤上行」、「西山」では句頭に用いられているし、「鹽州過胡兒飲馬泉」でも「入 新年」の「S」となりうる語がないので、いずれも[S-V-O]構造とはなり得ず、「〜が訪れる／〜になる」と解釈すべきである。これによって「入夜」＝「到了 晚上」また、[(好雨) 隨風 入 夜]が[S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>]構造となりうるということが証明された。

では、結局どちらがこの句を解釈するにあたって、より適切な文法構造となるだろうか。ここで注目すべきは、この句と共に対句をなす第四句目「潤物細無声」の文法構造である。この句の文法構造は、

[(好雨) 潤 物] <細>無 声  
[ S V O ] S<sub>II</sub> V S<sub>I</sub>

であり、下線部は明らかに[S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>]（存現文）構造である（好雨は万物を潤しているが、細やかで声が無い）。したがって、両句が対句である以上、この句も[S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>]構造でとる方が自然なわけである。また、思うに、[S-V-O]構造で捉えると、「好雨が雨に入り込む」となり、どちらかという動的な印象を受ける。一方、[S<sub>II</sub>-V-S<sub>I</sub>]構造で捉えれば、「雨が降り続くうち（いつしか）夜が訪れる」という静的な印象になり、「潜」（ひっそりと）という語も、より生きてくるのではないだろうか。以上のことから、「(雨が降ったまま) 夜になる」という「存現文」構造で捉えるのがよいと考える。

次に、B説の場合を考える。この場合の文法構造は、

(好雨) 隨 風 (好雨) <潜>入 夜  
(S) V O (S) V O

となり、A説の「雨が夜まで入り込む」と捉える場合のものと同じである。異なるのは、「入」を「(雨が) 降り始める」という意に捉える点である。しかし第二節において、第二句目の「発生」をもって「雨が降り始めた」とすると結論づけており、「好雨 入 夜」を「夜になって好雨が降り始めた」と捉えるのは不可である。

また、注釈書 d に挙げられている、『塩鉄論』水早篇の「雨必以夜」という記述であるが、これだけでは「夜になって雨が降り始める」という説の論拠とするには不十分であるように思われる。さらに、同じく B 説をとる注釈書 e の吉川幸次郎氏の「埃りっぽい風の吹く花曇りの日、夜になって風が落ち、雨戸をくって見れば雨であった」という感覚はむしろ A 説に近いように思う。雨が降り続くうち、いつしかひっそりと夜になり、ああ、雨が降っていたのだなあと「気づく」のが「夜」なのであり、そしてその雨に「思いをはせる」のが「夜」なのではないか。『塩鉄論』水早篇の記述にもそういったニュアンスが見てとれる。

#### 【結論】

■ 「雨が降り始める」ことは第二句目で言及されていること。

■ 共に対句を為す第四句目の文法構造を重ね合わせると、 $[S_{II}-V-S_I]$  構造でとるのが適切だと考えられること。

以上より、A 説、特に「入 夜」を「到了 晚上」と捉えるのがよいと考える。

#### 第四節 「花重錦官城」の解釈

A. 「花は重からん錦官城」と訓読する説

『中国の名詩鑑賞 5 盛唐』内田泉之助監修 中島敏夫編 明治書院 等

B. 「花は錦官城に重からん」と訓読する説

『漢詩大系第 9 卷 杜甫』目加田誠 集英社 等

【考察】 まず、A 説に拠った場合の文法構造を考えると、以下の 2 通りが考えられる。

a. 単語の羅列であり、成句とみなしていない。

b. 主述述語文の変形とみなす。

a は「花 重」を定語として、「錦官城」にかけた形と捉えた場合である。

b の「主述述語文」とは、いわゆる「ゾウハナ文」（象は鼻が長い）で、主体となる語を複数持つ文型である（多主語文）。詩の中で主述述語句が用いられている例としては、以下のようなものがある。

◆ 「玉華宮」杜甫

陰房 鬼火 青

◆ 「寒峽」杜甫

山谷 勢 多端

◆ 「蜀相」杜甫

錦官城外 柏 森森

◆ 「使至塞上」王維

長河 落日 圓

◆ 「破山寺後禪院」常建

禪房 花木 深

◆ 「聖善閣送裴 入京」李頎

梧桐 返照 寒

## ◆「閨夜」杜甫

五更鼓角 声 悲壮

bは以上の例のように、[錦官城 S<sub>II</sub> 花 S<sub>I</sub> 重 P ●○○○● (錦官城には花がしっかりと重く咲いている)] と、本来主述述語文であるのを、平仄を考慮して、[花 重 錦官城 ○●●○○] としている、と捉えた場合である。

次に、B説に拠った場合の文法構造は、

花 重 錦官城 (花が錦官城をずっしりと重く彩っている。／花が錦官城に重くのしかかっている。)  
S V O

となり、形容詞である「重 (zhòng)」を動詞的に用いていると捉えることになる。形容詞の動詞的用法としては、以下の作品が挙げられる。

## ◆「返照」杜甫

衰年 病 肺 惟 高 枕  
衰年肺を病んで惟だ枕を高くし

## ◆「重陽日陪元魯山德秀登北城矚对新霽

因以贈別時元兄屢有挂冠之意」蕭穎士  
悠悠 快 登望  
悠悠として登望を快うす

さてここで、他の作品において「花 重 錦官城」と同じ語順 [名詞 形容詞 名詞] をとっている句の例を見てみることにする。

## ◆「自京竄到鳳翔喜達行在所三首」其三 杜甫

影 静 千官裏

## ◆「宿龍興寺」纂母潛

松 清 古殿扉

## ◆「彭衙行」杜甫

夜 深 彭衙道

## ◆「冬宵引」宋之間

明月 的的 寒潭中

## ◆「秦州雜詩」其二 杜甫

月 明 垂葉露…①

## ◆「秋閨思」張仲素

碧窓斜月 靄 深輝…②

## ◆「望薊門」祖詠

蕭鼓 喧喧 漢將營

## ◆「宿疎陂驛」王周

微雨 瀟瀟 古驛中

## ◆「送刑桂州」王維

鑣吹 喧 京口

このように、[名詞 形容詞 名詞] という語順をとる句の数は多く、そのいずれも「花重 錦官城」と同様、文法構造の判断に悩むところであるが、私が調べた中では、成句とみなさず「定語・名詞」と捉えるべきものではなく、「主述述語文の変形」、もしくは「形容詞の動詞的用法」のどちらかである場合が多いようである。

例えば、①の場合は、[月 S 明 V 垂葉露 O (月が葉に垂れる露にきらめく)] と、形容詞「明」を動詞的に用いていると捉えることができる。



また、②の場合は本来、[碧窓斜月 S<sub>II</sub> 深輝 S<sub>I</sub> 靄 P (碧紗をたれこめた窓に斜めに差し込む月光は、その深くさしこむという光が薄ぼんやりとしている。)] という語順の主述述語文の変形と捉えるのが自然であろう。

では、「花 重 錦官城」の場合はどちらで捉えるのがよいだろうか。文法的に観て、「主述述語文の変形」、「形容詞の動詞的用法」のどちらで捉えることも可能であるので、詩の流れにおいてどちらがより自然で無理がないか、という点が決め手となるだろう。

第七句目、八句目、暁看紅湿処 (夜が明けて、くれない色にうるおいを帯びたところに目をやるならば、) 花重錦官城 (花々が錦官城の街をしっかりと重く彩っているであろう。) というつながり方を考えると、[S-V-O] つまり、「形容詞の動詞的用法」と捉える方が自然であると思われる。

また、第七句目、八句目において作者の視線の先にあるのは「花」であり、従って最も重点を置くべき語は「花」である。重点を置く語をより明確にして表現しようとするならば、複数の主体語を持つ「主述述語文」よりも主体語を単独で用いる文形の方が適切であろう。つまり、[錦官城 S<sub>II</sub> 花 S<sub>I</sub> 重 P (主体語…錦官城、花)] とするよりも、[花 S 重 V 錦官城 O (主体語…花)] とした方が、より「花」に注意が注がれるはずである。

#### 【結論】

- 文法的に問題がないこと。
- 詩の流れとして、より自然であること。
- 主体語「花」に重点が置かれる形であること。

以上より、「花 重 錦官城」はB説「花は錦官城に重からん」のように訓読し、形容詞の動詞的用法と解釈するのがベターであると考えます。

## お わ り に

以上、「春望」、「春夜喜雨」両詩の解釈を試みてきた。結果的に文法を中心に考察を進めることとなったが、私の勉強不足また調査不足により、いささか論拠が薄弱になってしまったことが悔やまれる。文字数が限られ、平仄をはじめとする厳しい諸規則をもつ漢詩という表現形式において、その句の構造を文法的に捉えることの難しさに四苦八苦しながら取り組んだのだが、一方、文法という非常に客観的で説得力のある道具を用いて自分の納得のいく結論を導き出すことの楽しさも味わうことができた。また、漢語の文法を今一度、整理しなおす良い機会となった。

これまで杜甫というと、漠然と、中国の偉大な詩人、そしてその詩は重くどこか沈鬱なもの、というイメージを持っていた。非常に有名な人物ながら、あまり詳しい知識をもたなかったのだ

が、今回こうして『杜甫研究』という題目で論文に取り組み、この詩人の生涯や作品とじっくり向き合うことによって、私なりの杜甫像が見えてきたように思う。

生来、謹厳実直な杜甫は、詩形式においては規則に忠実に完璧な形を追求し、殊に規則の厳しいとされる律詩における評価が高く、「詩聖」と称されて広く人々の尊敬を集めた。その詩は社会矛盾や戦争によって苦しめられる民衆の姿を直視し克明に描き出したものが多く、重く沈鬱な印象はそこから生じるのである。詩全体に、当時の厳しい現実に加え、杜甫自身のやるかたない苦悩がにじみ、ときに息が詰まるような思いになる。

また、その表現法、語の用い方は極めて写実的で客観的である。戦争のありさまや見聞きしたこと、史実を主観に陥らず、ありのままに描いている。杜甫の詩はその芸術性の高さもさることながら、唐代の政治や社会を広く深くうつつし出しており、その点においても他の詩人の詩に比べて優れているといえる。そして、その写実的かつ客観的な表現が私たち読み手に豊かなイメージを抱かせ、強い共感をもたらす所以となっているのであろう。

今回、杜甫の詩を題材として研究することになり、その結果本当に正確な解釈を導き出せたかどうかは分からないが、以前よりも確実に、客観的な視点で詩を読み解く姿勢を身につけることができたと思う。

#### 〔監修者あとがき〕

あっぱれと言うほかない見事な卒論の出来栄である。口頭試問の際、「美馬さんは現代日中両国の唐詩研究者として2,300メートル先頭を切って走っているね」と褒め称えた。引用例詩に誤解があるとすれば、むしろ読者諸氏の指摘と反論を待ちたいと思う。中国文学作品の解釈と鑑賞の世界には、常に正確な「漢文読解」をしなければならぬという難関が控えているのであるが、適切な指導と中国語のベースを踏まえた本人の頑張りさえあれば、かくも容易に乗り越えて読み解いて行くものだということが実証され、今更ながら感じ入っている。後生畏るべしとはまさにこのことを言うのだろう。

2002.12. 記